

に候處、此返答は入らず候。とかくひと通りは、某に是非々々見せ給り候へとの事にて、七十餘の老人の頼に黙しがたく候とて到來候き。幸に返答の入らぬと候故に、一見の後に返して事終り候。その時前後に二通申來り候趣とは、竹田の書中はたちこえ候處も見え候か。但し先王の樂をも興り候事と申され候に至ては、同じ見解らしく候。これらいづれも、其道に、多年心力を盡され候て見付られ候處あるが故たるべく候。然るをこなたに心得ぬ事とて、とかくを存候は、夏虫氷を疑ふにも似たる事か。某においてはとかくの事申答べき愚管も無之候。以上。

十月二十五日

白石

一、白石丈人の書狀(三)

樂聲の事に付、先年京師御遊學の日うつし得られ候一冊子、御見せ被下候。惕齋事如此の事に多能なる人にて、門中にもこれらの著述めされ候人有之事、敬服の事に候。此内こなたに存じ候はぬ事彼是候て、御庇護故に老後の學問仕候事に候。是又不淺辱次第、卒業今日及還璧候。五常樂の事蒙仰候。是はこなたにて出來り候樂曲に候。曲名は

さだめて、漢文の五常樂に取られ候事と察せられ候。雍和の聲調有之事、舜韶に比し申すべし歟の事は、さも可有之候。舜韶のごときは、春秋の日季札魯にその樂を觀られ、孔子齊にその聲を聞れ候ほどの事に候へば、的にこれ舜韶と申候はむは、牽附の説にも可有之か。もしその説を廣め申候はむには、天地間この一箇大和の氣候はむには、其聲に應じ候樂は、必しも后夔の奏に出ず候とも、韶樂とその和を同じくすべしとに候。しかるを舜韶の遺音とのみ限り候はむ事、なにとやらむ拘り候やうにて、學者の弊に近く存ぜられ候。

一、蕪菁根の事、叢曲家にて客來と申事、復菴御ものがたり聞めし候。老朽説に出候かの御垂問にて候。たしかに來歴承候事にもなく候。先年長崎へ唐山の商船入り來り、常例にて食品を奉行へねがひ、船中へ送り遣候事候。但しこれは以前そのさし出し候單帖に、一曰之と申す一品有之、大小の譯官しらぬ事と申時、奉行所にて年久しく候もの故に、彭城仁左衛門にたづねられ候へば、もしイハシの魚の事にも候はんかと申候故、イハシをゆるし申され候へば、謝し

候事有之物語に付て、客來の字むかし鎌倉・京の時に、宋・元の僧つねに入來候事にて候へば、これらの事のごとき事に候か。二字の音カブラの語に相近く候。すべてこれらの事の如き、たしかに物にしるし候もなく候へども、ふるく申傳候事に、扇流しの屏風、必ず公方御成に用ひられ候ごときの記事も候など申候事にも可有之候。これら無稽の言は、申も出がたく候へども、御たづねにつきて黙止し候はいかゞしく如此候。已上。

十一月十九日

白石